若き附中

熊本大学教育学部附属中学校
学校だより
平成３０年１１月１日
第１１号
《文責：高木》

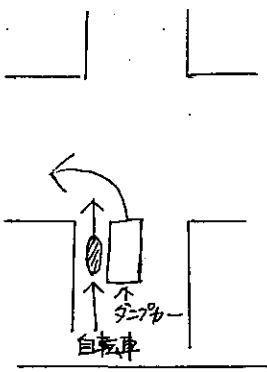
忘れられない中三の一日

中学生を相手に授業をしたり話をしたりするときに「自分が中学生だったとき、どんな事を考えていたのか、どんな事をしていたのか。」という事を、よく思い出そうとします。しかし、そのほとんどは忘れてしまっていて思い出すことができません。ただ、そんな中、10月30日だけは忘れることができない日です。

10月30日、その日は、日曜日でした。この日の前に学生大会があり、私は友達と同じ場所で絵をかき、30日(日)に、もう一度その場所で絵を仕上げようという話になりました。ただ、私は日曜日に法事があったので、その誘いを断りました。

30日(日)の午前11時ごろだったでしょうか。家に電話がかかってきました。「松田が死んだばい。」（松田というのが、私と一緒に絵をかいていた友人です。）

交通事故だったので、交差点で左折するダンプカーにまきこまれ、即死だったという連絡でした。



この電話をうけた時、体が凍りました。涙が出ることもなく、ただ何をどうしていいのかわからない状態でした。言葉が出ないという感じだったのです。

今、考えると、中三の10月30日で人生が終った松田、さぞかし無念だったろうと思います。足が長く運動神経がよかった松田、高校入試について、共に語り希望をもっていただけに…。

交通事故による死者は、日本では、一日あたり10人くらいだそうです。4日間で、一クラスの生徒が死してしまう数です。当り前のことですが、事故にあおうと思って事故にあう人などいないのです。みんな、自分は大丈夫だろうと思いながら事故にあってしまうのです。

命は、たった一つ。

しかも、一回きりです。最近のニュースでは、自ら命を断ってしまうという悲しいニュースもあります。しかし、どんなにつらくても、自分で命を断ってはいけません。

命は、たった一つ、しかも一回きり。一度断ってしまった命は、やりなおしがきかないのです。

あの事故から41年、その間にどれだけの人が涙し、祈り、事故現場に花をたむけたことか。しかし、どんなに悲しんでも、思い出しても松田は決して帰ってこないのです。だからこそ、私達は、自分が生きているこの時を大切にしなければならないと思うのです。

百聞は一見に如かずのつづき

「百聞は一見に如かず」ということわざがあります。ある事がらや物についての情報を、どんなにたくさん聞いたり本を読み学んでいたとしても、実際に見たり、さわったり、体験したりして学ぶことには、およばないという意味です。つまり、教室の中だけで学習するのではなく実際に体験することが重要なのです。その意味で、来週の2年生の修学旅行では、これまでの事前学習の学びを、より一層深めてきて欲しいと思います。

ところで、この「百聞は一見に如かず」につづきがあるのは知っていますか？諸説ありますが、このつづきは「百見は一考に如かず」だそうです。どんなに見学や体験をしても、そこで考えるということがなければ、意味がないという意味です。

修学旅行に限らず、様々な体験学習が、単なる経験だけに終わらず、そこで「なぜだろう」「どうなっているのだろう」「どんな気持ちだったんだろう」と少し立ち止まって考えてみましょう。さらに深い学びや気づきに出会えるかもしれません。

「百聞は一見に如かず」そしてさらに「百見は一考に如かず」なのです。

※ 先日のPTAバザーで、金色の大きな額縁に、ときめきを感じ、すぐさま購入しました。校内学生大会の最優秀作品を入れて、校内に飾りたいと思います。すばらしい額縁をはじめ、ステキな物品を出品していただいた保護者の皆様、ありがとうございました。